



えん罪 JR 浦和電車区事件 報告会 2/13参議院議員会館

渦巻く満腔の怒り！

えん罪 JR 浦和電車区事件の上告棄却にともない JR 総連・JR 東労組は2月13日、参議院議員会館で「えん罪 JR 浦和電車区事件報告会」を開催した。報告会には作家・佐藤 優氏をはじめ、新党大地・真民主の鈴木宗男代表、ジャーナリストの魚住昭氏、宮崎学 氏、一水会・木村三浩代表、そして田城参議院議員など6名の国会議員と24名の代理人など120名が参加。事件で弾圧されたが組織は破壊されず、権力の狙いは貫徹しなかったとして、闘いの意義を再確認した。

組織破壊攻撃に「勝利」宣言！



《闘いの報告》

美世志会 代表 上原潤一

残念ながら、闘いに全力で進んできたが裁判では敗訴した。取調べで言われてきた「JR 総連・JR 東労組は平和運動をやりすぎる」「平和運動なんて生意気だ」。そして「JR 総連・JR 東労組は内側から壊れないから外側から権力が介入するんだ」。この言葉どおり弾圧は、国策による労働組合つぶしの大きな意味があったということだ。しかし、その闘いに、私たちは実質的に勝利したことを皆さんと確認したい。

棄却決定の郵送は、悔しかった。これが司法の番人による判断なのか、データベースで内容に踏み込まない決定を、怒りを込め弾劾したい。

関係のない家宅捜索や「革マル派の犯行」とキャンペーンがされた。しかし、Yの自らの意思による告訴ではなく、公安二課の意図であることも明らかにされた。裁判所は攻撃の本質を見抜かなかった。しかし私たちが負けなかった。

世の中にはえん罪に遭い、悩み、苦しんでいる人が数多くいる。再審開始の動きもあるが、美世志会はえん罪で苦しむ人のネットワーク作りも含め、これからも闘っていききたい。

私たちは下を向いていない！これから新たに前に向かって進んでいく！その決意を述べ、9年3カ月間のお礼と、この勝利集会をしっかりと胸に、前進していくことを決意し、本日のお礼とさせていただきます。これからも共に闘います。



9年3ヵ月、美世志会と闘った。最高裁決定を満腔の怒りで弾劾する。最高裁判所は法の番人としての地位を放棄した。この汚点は将来、弾劾される。

えん罪・国策弾圧の本質は、「平和運動は生意気」「内から壊れないから外から壊す」「組織を半分にしてやる」という取調べからも明らかだ。不当判決だが、組織は半分に減らず、より強固に団結し、多くの支援者に出会えた。本質的には組織を守ったし、内容的には勝利している。

反弾圧の闘いは終焉しない。人民や労働組合、社会団体が弾圧される社会は許されない。闘いを強化し、えん罪や弾圧を受けている人たちと連帯の輪を広げ、社会正義のために雄々しく闘うことを宣言する。

【来賓あいさつほか】

ジャーナリスト・佐藤 優
新党大地・真民主・鈴木宗男
ジャーナリスト・魚住 昭
ジャーナリスト・宮崎 学
参議院議員・田城 郁
一水会 代表・木村三浩
弁護士・中村忠史

これは勝利集会だ。最初からイカサマ裁判。美世志会は誰もやましいとは思っていない。権力のシナリオで弾圧。判検交流は泥棒と警察の交流だ。正しい判断は出ない。美世志会を支える。共感は広がっている。労組も美世志会を守り、求心力が高くなった。勝利だ。「暴排条例」「暴対法改正」に声明。表現者の自由を守る。裁判は一つの手段。判決に右往左往しない。力強い集会。冤罪確定後も再検証する機関をつくるべき。平和・人権・民主主義確立に奮闘する。権力に成り下がったマスコミ報道やブッシュの戦争犯罪にも責任を取らせるべき。公安二課がつくった事件。脆弱な証拠もたれあいでも罪。最高裁が頂点の裁判制度が揺らいでいる。危機的だ。冤罪再審の流れにも逆行している。

JR東労組副委員長 佐藤公夫 国鉄改革から25年、事件後の採用は1万5千人。攻撃は厳しくなるが一致団結して闘う。

最高裁判所第三小法廷は2月6日、「えん罪 JR浦和電車区事件」の上告を「棄却」した。「事件」発生から9年3ヵ月、2007年7月17日に第一審有罪判決、2009年6月5日に控訴審でも有罪が出され、即時上告していた。判決では憲法28条の労働者の団結権を否定し、重大な事実誤認を問題にしないなど、司法が労組弾圧に加担するものだ。

●まじめな労働運動壊滅が狙い——弾圧の端緒

弾圧が顕著になったのは2001年9月11日、米同時多発テロに遡る。JR総連は「テロにも戦争にも反対」と声を上げ、松崎明氏は『鬼の咆哮』を緊急出版し、「世紀の犯罪人・ブッシュ・ブレア・小泉」と批判した。さらにJR総連は、アフガニスタンにJR総連・田城郁特別執行委員(当時)を派遣し、難民支援。一方で9条連運動を拡大し、中国への小学校建設や森づくり運動など、愚直に運動をすすめた。

事件では、こうした労働組合の運動と組織の破壊が狙われた。弾圧は浦和電車区事件にとどまらず、東京駅暴力でっち上げ事件、2件の「業務上横領事件」でっち上げ、蒲郡駅事件など、次々と仕組まれた。

弾圧に並行し、国会での革マルキャンペーン、週刊誌での悪評連載、JR連合による悪宣伝など、周到な重包囲網が張りめぐらされた。

●内部からも組織破壊

いうまでもなく組織内の組織破壊者=嶋田一味はJR浦和電車区事件の弾圧の前日に辞任・逃亡。「弾圧でない場合もある」「あの人たち(美世志会)はクビですからね」と反弾圧の闘いを放棄した。その後も、マスコミを集めて資料提供し、「革マルキャンペーン」に油を注いだ。さらに福原元委員長は『小説労働組合』を発刊し、松崎明氏が「組織を私物化している」などと、さも事実かのように虚像を押し出し、悪宣伝で弾圧に加担した。現在、「スパイ糾弾訴訟」や「新『小説労働組合』訴訟」など、訴訟での闘いも続いている。

労働組合活動が犯罪とされた。最高裁第三小法廷は、憲法違反、誤判をしてでも有罪とせざるをえなかったのだ。国家にしかできない犯罪は、戦争と、まさにえん罪だ。最高裁の上告棄却は満腔の怒りで弾劾されなければならない。

しかしJR総連は弾圧に負けなかった。えん罪 JR浦和電車区事件の闘いに、私たちは勝利した。JR総連はこれからも弾圧に抗し、えん罪撲滅と取調べの可視化実現、平和、人権・民主主義確立に向け、連帯した闘いを創る。